学苑・人間社会学部紀要　No. 940　71～79（2019・2）

〔研究ノート〕

トルコ西部エーゲ海地域における市場空間の現状

鶴　田　佳　子

Market Spaces in the Aegean Region of Western Turkey

Yoshiko TSURUTA

This paper discusses current utilization of market spaces in the Aegean region of Western Turkey focusing particularly on five cities in İzmir province (İzmir, Foça, Çeşme, Alaçatı and Urla). The purpose of this paper, which is part of a larger ongoing study conducted through documentary research and field surveys, is to show some examples and provide input for further investigations and future tasks.

The author observes how the markets (pazar in Turkish) are connected to other urban spaces, the manner in which they have been used, and analyzes the markets' spatial characteristics in each city. According to the survey in 2018, the city of İzmir currently has 115 pazars in the city center and 99 pazars on the suburban area of the city. In the city center, the number of pazars was increased along with the population in the last 8 years. This suggests that traditional pazars are preferred to supermarkets and they are continuously changing to fit the needs of locals. Additionally, a new type of pazar, selling items like women's handmade crafts market, is increasing in Turkey.

Key words: Turkey（トルコ）, Aegean region（エーゲ海地域）, market space（市場空間）, urban space（都市空間）

1. はじめに

トルコの国土は日本の約2倍の面積を有し，ヨーロッパとアジアにまたがる。南は地中海，西はエーゲ海，北は黒海に面し，三方を海に囲まれた立地である。気候風土は地域によって異なるが，都市構造としてどの地域にも共通するのは，規模の大小に関わらず中心部にトルコ語でチャルシュ[1]と呼ばれる商業空間を有することである。筆者は2007年からトルコ 都市・市場空間調査を定期的に実施し，チャルシュや定期市であるパザル[2]の空間的特質及び地域性について継続して研究を行っている。

本稿ではトルコ西部のエーゲ海地域沿岸部に対象を絞り，2018年9月に実施した現地調査をもとに市場空間及び都市空間の活用状況について述べ，今後の研究課題を検討する。対象都市は，イズミール県の中心都市イズミール，港を有するリゾート地フォチャ，チェシュメ，アラチャト，オリーブやワインの産地として知られるウルラの5都市（図1参照）である。5都市ともイズミール県内の都市であるが，中でもイズミールはトルコ第3の大都市であり，ウルラやフォチャなど隣接する都市も含む形で，イズミール大都市圏を形成している。

対象とする市場空間は，都市のセンター領域を占めるチャルシュと定期市パザルの開催地であり，都市構成の中での位置付けや他の都市空間との関連性に着目し調査を行っている。現地調査は，現地研究者及び各行政機関，住民などの協力を得ながら実施し，空間の活用状況を記録するとともにヒヤリング及び資料収集を行っている。

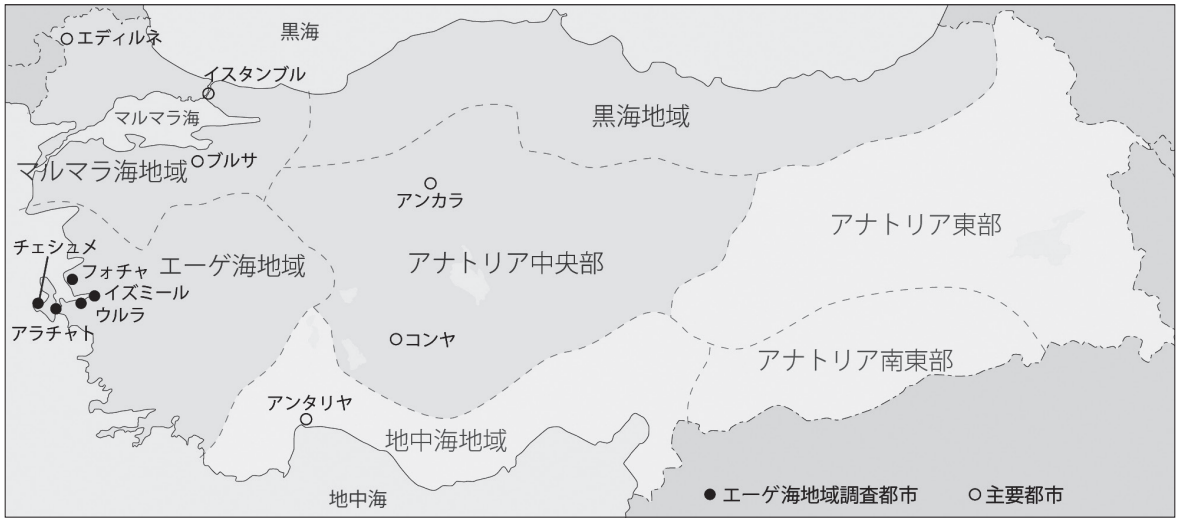


図 1. 調査都市位置図

2. エーゲ海地域沿岸部 5 都市の市場空間

エーゲ海地域は温暖な地中海性気候であり，夏季は気温が高く乾燥し，冬季は温暖で雨の降りやすい天候となる。その気候風土が育む産物にオリーブや葡萄の他，各種野菜があり，市場には色とりどりの野菜や果物が並ぶ。エーゲ海地域は豊かな食材と食文化の伝統を有するエリアである。ウルラには古代のオリーブ搾油所の跡があり，郊外には葡萄の果樹園と醸造所が点在する。市内中心部のチャルシュでは 2015 年から 4 月末に，国際アーティチョーク・フェスティバルが開催されるなど，様々なイベントによる交流を楽しみながら食文化の豊かさを発信している。今回は調査できなかったが，ウルラ近郊のシェフェリヒサールはスローフード，スローライフを掲げる，トルコで最初のスローシティに認定された都市[3] であり，中でもスアジュク地区の日曜市は女性達が各家庭で作ったジャムや漬物，惣菜や焼き菓子などを販売していることで知られ，多くの観光客を呼び込んでいる。

調査 5 都市の規模は異なるものの観光資源を有する都市として，居住者だけでなく，一時滞在者及び来街者を多く迎える共通点がある。ここ 5 年間の人口の推移（表 1 参照）をみると，国際的な商業都市イスタンブル，首都アンカラに次ぐ大都市圏であるイズミールでは 2013 年の 406 万人から 2017 年の 428 万人まで 5 年間で 22 万人増えている。イスタンブル及びアンカラの人口の推移からもわかるように，大都市への人口流入は顕著であり，都市開発やインフラ整備が推し進められている。例えば，イズミールの中心部コナク区では，2018 年 3 月に路面電車が開通し，バス，地下鉄と共に市民及び観光客にとって利便性の高い公共交通機関となっている。

フォチャ，チェシュメ，アラチャトは，いずれも

表 1. 調査対象 5 都市及び大都市の 5 年間の人口推移

	都市名	人口（人）*1				
		2013	2014	2015	2016	2017
調査5都市	イズミール	4,061,074	4,113,072	4,168,415	4,223,545	4,279,677
	ウルラ	56,751	59,166	60,750	62,439	64,895
	フォチャ	32,534	30,002	28,647	28,591	31,061
	チェシュメ	35,965	39,243	39,243	40,312	41,278
	アラチャト	9,546	9,954	10,107	10,318	9,745
参考	イスタンブル	14,160,467	14,377,018	14,657,434	14,804,116	15,029,231
	アンカラ	5,045,083	5,150,072	5,270,575	5,346,518	5,445,026
	トルコ全体	76,667,864	77,695,904	78,741,053	79,814,871	80,810,525

*1: トルコ統計局のデータをもとに筆者作表

エーゲ海と砂浜を求めて国内外から観光客が多く訪れるリゾート地である。文化観光省の統計データによると[4]，トルコへの外国人来訪者数は，2016年の25,352,213人から2017年の32,410,034人まで増えており，月別でみると7月をピークに9月までの3カ月間が2年とも最も多い時期である。現時点での最新データとして，3年間の9月の外国人来訪者数を比較すると，2016年に2,855,397人，2017年に4,076,630人，2018年に4,792,818人と毎年伸び続けている。2018年9月の外国人来訪者のトルコへの玄関口として，空路ではイズミール県は第4位，海路では同じエーゲ海のムーラ県，アイドゥン県に続いてイズミール県は第3位である。エーゲ海沿岸のリゾート地は今回の調査地に限らず，国内からの訪問者数が夏期は増加するが，国外からの訪問者も増加傾向にあり，地域の活性化にも観光は重要な要素である。本研究で対象とするチャルシュ，パザル双方とも日常生活に欠かせない市場空間であるが，いずれの空間も各都市の地域性や特性がみられる場所であり，来訪者にとっても訪問の目的ともなり得る。来訪者や観光に関わる詳細な分析は今後の課題とする。

調査5都市の特徴について以下，市場空間を中心に確認をする。イズミールは，エーゲ海地域の産業と観光の拠点を担っている。センター領域は他の4都市と規模が大きく異なるが，港に隣接する形で伝統的なチャルシュが広がっている点はフォチャ，チェシュメと共通する。チャルシュ自体の規模も大きく，チャルシュ内には複数のモスクと多数の伝統的な商業施設が点在し（写真1参照），通りやブロックごとに同業種が集まる。一大問屋街であり，港前の広場，海岸沿いの公園とともに連続した歩行者空間が形成され，常に多くの人で賑わう場所である。定期市は市内全域で数多く開催されているため，詳細について過去との比較データも含め，後述する。

写真1．イズミール中心部のチャルシュ内の通り
右手が伝統的な商業施設

フォチャは，規模の小さな港の周辺を中心にチャルシュが設けられており，さらに海側へ飛び出す形で城塞が残っている。チャルシュと一体化している港周りは，歩行者空間として整備されており，魚料理のレストランやカフェが軒を連ねる。市庁舎横の港に面する広場は，コンサートなどイベントも開催され，バスターミナルも近く，立地，機能ともに都市の中心的な役割を担っている。調査時の9月10日は，広場へとつながる海岸沿いの歩行者空間を市民がパレードするイベントがあり，海岸に面したカフェやホテルのテラスは多くの観光客で賑わっていた。水際の歩行者空間には所々ベンチが配置され，海を眺めるだけでなく，海水浴のための荷物置きとしても活用されていた。水際の歩行者空間は散歩などの通行機能だけでなく，海水浴場やランニングコースなど，スポーツの場としても活用されている。チャルシュは港や広場に隣接する位置にあり，規模は小さい。火曜日にチャルシュ近くの街路と屋根付きの市場施設を使って定期市が立つ。複数の街路にテントが張られ（写真2参照），衣類，靴，日用雑貨が並ぶ。屋根付き市場とその周辺の空き地には，野菜や果物などの食料品関連の露天商が店開きをする。調査時の出店数は385軒であった。これは市役所の定期市管理担当者に確認した数である。この火曜市エリアに隣接する公園で日曜日にイェルユズ・パザルが開催されている。国際的なスローフードの活動と連携しており，英語ではEarth Marketと呼ばれ，そのトルコ語がイェルユズ・パザル[5]である。また，これらのパザルからは離れるが，城塞の壁沿いに女性達によるクラフト市（写真3参照）がある。調査時は屋台12軒のうち数軒が店開きをし，スカーフなどの手工芸品を女性達が販売していた。この城壁の内側は野外劇場として活用されている。この他，

港に面して役所の管理による魚市場の施設が建っている。

チェシュメは，対岸のギリシャ領キオス島への連絡船が発着する船着き場やヨットハーバーがあり，リゾート地として特に夏は多くの滞在者で賑わいをみせる。港から海岸沿いに歩行者空間が整備されており，その核となる広場には市庁舎と城塞が面する。広場からはメインストリート（写真4参照）となるチャルシュエリアが広がる。城塞の横，港付近にかつての隊商宿キャラバンサライがホテルとして再生している。キャラバンサライの隣には，城塞を活用した歴史博物館が海を臨む形で建っており，城塞内の塔からはエーゲ海とマリーナを見渡すことができる。チャルシュは観光客の多い街らしく，レストランやカフェ，土産物屋が並び，路地にも魚料理のレストランのテーブルが店舗前にはみ出している。

アラチャトは中心部の保存地区に白壁の伝統的な住宅が立ち並び，その住宅をホテルやレストラン，カフェ，ギャラリー，店舗などに活用している。小高い丘に風車が並び，通りに面する建物の白壁とカラフルにペイントされた窓枠や窓辺の花が映える景観は，エーゲ海のギリシャの島に見られる街並みに類似する。地区内の街路は車が制限され，道幅が狭く，歩行者優先の観光化されたエリアとなっている。その一画にかつての教会がモスクとして活用されている施設があり，その周辺は広場になっている。保存地区全体がチャルシュと認識できるほど，かつての住宅地はリゾート地の賑やかな空間へと再生している。保存地区の南側の複数の街路を使い，土曜日に大きな定期市が開催される（写真5参照）。街路を埋め尽くすようにダイナミックにテントが張られ，街の規模に見合わない大きなパザルである。商品は通常の野菜や日用雑貨も並ぶが，夏期のみの一時滞在者や観光客向けの衣類やアクセサリーなども多く並び，色鮮やかである。中心部から住宅街の街路を抜け，最終的に町外れのバスターミナルに隣接する駐車場までつながる。アラチャトは風が強く，ウインドサーフィンの街としても知られているが，港は

写真 2.　フォチャの火曜市
住宅街の複数の街路にテントが張られる

写真 4.　チェシュメのメインストリート
チャルシュの中心軸をなし，海岸沿いの水辺空間へとつながる

写真 3.　フォチャの女性達によるクラフト市
左奥に数軒開店している

写真 5.　アラチャトの土曜市
伝統的な民家が面する街路にテントが張られる

街から離れているため，フォチャやチェシュメのように水辺の歩行者空間とチャルシュの連携はみられない。

ウルラは，イズミールの郊外に位置する都市である。イズミール市内から地下鉄と路線バスを乗り継いでアクセスでき，イズミール都市交通カードも使用できる。中心部は内陸部にあり，港エリアとは5キロほど離れている。港周りは，フォチャやチェシュメと同じく，カフェの並ぶ歩行者空間や広場がある。港から一街区，内陸部に入った位置に古代のオリーブオイル搾油所跡があり，その横の空地で日曜市が立つ。日曜市はパラソルの並ぶ露店が中心で，一部固定の店舗になっている部分がある。ウルラ中心部のパザルはチャルシュから離れた住宅街に屋根付きの施設として建設されている。現在のウルラの都市センターは市庁舎が面する広場であり，チャルシュは広場に隣接する形で一体化している。チャルシュの一画には中庭を囲むタイプの伝統的な商業施設が維持されている（写真6参照）。また，チャルシュ内のザフェル通りをアート通りと命名し，車を規制して街路にテーブルを並べ，クラフト市を開催している（写真7参照）。この街路には店舗の他，保存されている伝統的な邸宅や文化施設もあり，アートに力を入れたエリアが形成されている。また，新市街中心の広場裏手に女性のためのパザル会場がウルラ市から提供されている。旧修理工場を再生させたホール空間の中に机を並べ，手工芸品や焼き菓子，惣菜など女性による手作りの品を販売する。毎週土曜に開催されている。ウルラは文化的な要素や豊かな食材を有する街として，前述のアーティチョーク・フェスティバルのように個性あるイベントをいくつか開催し，地域の特色づくりに努めている。都市内のみならず，近郊の村バルバロスキョイでも地域の大学や芸術家が村の住民と共同で運営するかかし祭りがある。このイベントは9月初めに3日間開催され，2018年は3年目の開催とのことであった。村のメインストリートには手工芸品や，野菜などの露店が並び，街路のみならず住宅の倉庫や中庭も公開し，そこで料理やお茶を有料で振る舞う。村中いたるところに自作のユニークなかかしを展示し，村全域がイベント会場となる（写真8参照）。図書館や歴史的な邸宅がギャラリーとなり，アート作品に触れる場やスタッフとの交流の場もつくられている。調査時，村の中心のモスク前広場では楽団に合わせて人々が自由に踊り，一角ではかかしコンテストが開催されていた。住宅街の路地の交差部には子供向けのワークショップがあり，民家での住民との交流

写真6. ウルラ中心部のチャルシュで保存・活用されている伝統的な商業施設

写真7. ウルラ中心部のチャルシュ内の街路で開催されるクラフト市

写真8. ウルラ近郊のバルバロスキョイでのかかし祭り

も含め，小さいながらも多様な交流の仕掛けを有する文化的なイベントとして村全体が一体化していた。

3. 定期市の現状

パザルは週に1回，場所によっては2回以上，定期的に開催される市場である。テントや陳列台を並べて店開きする仮設のものと常設の市場施設がある。常設の施設は屋根付きの簡易な構造のものがほとんどであり，一部に壁を有するものもあるが，柱と屋根のみのオープンな空間に陳列台を並べるものが多い。ほとんどが地域住民のためにセムト・パザル[6]と呼ばれる市場であり，蚤の市や魚市場のような特化した商品を扱う特殊市とは区別される。火曜に立つ市をサル・パザル[7]と言い，市が開催される曜日名で呼ぶこともある。今回の調査地だけでなく過去の調査事例をみても，街路にテントを張り，露天市として開催するケースの方が多いものの，新たに開設する市場については，屋根付きの市場施設を建設し，設備面での配慮がなされているものが増えてきている。パザルで扱われる商品には，野菜や果物，魚などの生鮮食料品，チーズやヨーグルトといった乳製品，米，豆類，香辛料などの乾物，オリーブや油，靴，カバン，衣類，タオル，スカーフ，テーブルクロス等の布類，食器，鍋をはじめとする調理器具，アクセサリー，おもちゃなどの雑貨類，季節によっては苗木など日常生活に関わるあらゆるものがある。また，軽く食事のできるコーナーが一角にある場合も多い。

イズミール以外の各都市でチャルシュとあわせてパザルの状況について上述してきたが，イズミールは中心部だけでなく，大都市圏として周辺部も含む開催情報を公開しており，大都市圏全体の定期市の開催状況を把握することができる。2018年現在，開催している定期市数を行政地区別，開催曜日別で整理し，中心部と周辺部での特徴をみる。表2は大都市圏の中でも中心部にあたる11区の定期市数を曜日別に示すとともに，過去の調査データから2010年の開催数も整理し，まとめたものである。都市の発展と比較するために2010年と2017年の人口もあわせて掲載する。人口はトルコ統計局の公開情報を確認したもので，最新のデータは2017年になるため，定期市の最新データが2018年ではあるが，都市規模の目安として使用している。図2はイズミール大都市圏の範囲を示す地図であり，行政区

図2. イズミール大都市圏行政区分図
図中の数字は表2及び表3に示す行政区分の番号

表 2. イズミール大都市圏の中心部の定期市開催状況

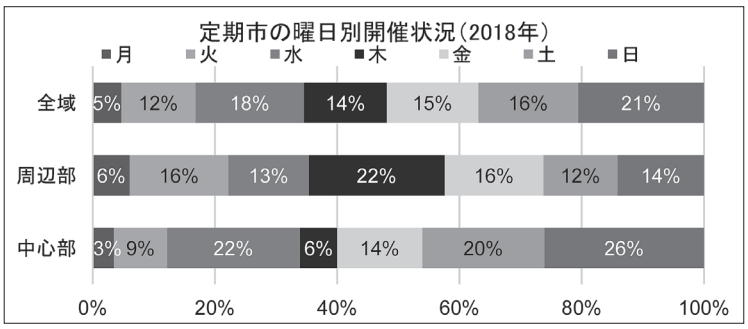
		人口（人）		2010		2018		曜日別定期市開催数（2018）						
行政区名		2010	2017	開催地数	定期市数	開催地数	定期市数	月	火	水	木	金	土	日
1	バルチョバ	77,767	78,442	2	2	1	2			1			1	
2	バイラクル	307,898	314,402	11	13	19	19	1	1	3	3	2	4	5
3	ボルノバ	419,070	442,839	14	16	16	18		2	4	1	3	2	6
4	ブジャ	423,082	492,252	13	14	14	17			4			3	10
5	チイリ	157,530	190,607	8	8	11	11		1	2	1	2	3	2
6	ガジエミル	129,691	136,273	7	7	7	7	1		2		1	2	1
7	ギュゼルバフチェ	24,462	31,429	2	2	3	3		1				2	
8	カラバウラル	458,890	480,790	12	12	12	16	1	2	4	1	5	3	
9	カルシュヤカ	310,061	342,062	7	9	7	9		2	2		1	1	3
10	コナク	405,580	363,181	15	15	9	11	1	1	2	1	1	2	3
11	ナルルデレ	72,832	66,269	1	2	1	2			1		1		
	総計	2,786,863	2,938,546	92	100	100	115	4	10	25	7	16	23	30

表 3. イズミール大都市圏の周辺部に位置する都市の定期市開催状況

		人口（人）	2018		曜日別定期市開催数 (2018)						
都市名		2017	開催地数	定期市数	月	火	水	木	金	土	日
12	アリアー	94,070	4	4			1		2	1	
13	バユンドゥル	40,258	4	4	1		1	1	1		
14	チェシュメ	41,278	7	7		1	2	1	1	1	1
15	ディキリ	41,697	4	4		2		1	1		
16	フォチャ	31,061	5	5		2	1				2
17	ケマルパシャ	105,506	10	10		3	1	3	2	1	
18	メンデレス	89,777	4	5			1	1	1	1	1
19	メネメン	170,090	10	10	1	2	1	2	1	1	2
20	オデミッシュ	132,241	13	13	2	1		1	4	4	1
21	セフェリヒサル	40,785	3	3				1	1		1
22	セルチュク	35,991	8	9	1	1	1	2		1	3
23	ティレ	83,829	2	2		1			1		
24	トルバル	172,359	19	19	1	3	3	8		2	2
25	ウルラ	64,895	4	4			1	1	1		1
	総計	1,143,837	97	99	6	16	13	22	16	12	14

表 4. イズミール大都市圏における定期市の曜日別開催状況の比較

	開催地数	定期市数	月	火	水	木	金	土	日
中心部	100	115	4	10	25	7	16	23	30
周辺部	97	99	6	16	13	22	16	12	14
全域	197	214	10	26	38	29	32	35	44



分の数字は表2，表3に示した行政区分の番号に対応させ，イズミール市役所の公開地図データをもとに筆者が加工したものである。さらに，表4は表2，表3で整理した定期市数を中心部と周辺部に分け，曜日別開催状況を比較したものである。

イズミールの人口は2010年と2017年を比較すると，約15万人増えている。イズミール大都市圏中心部11行政区の定期市開催の内訳を比較すると，定期市の開催地は92箇所から100箇所へ，開催数は100件から115件へ増加している。行政区別にみると，歴史的なチャルシュのあるコナク区は都市のセンターとして商業・業務機能がメインのためか，2010年よりも4万人強減少している。定期市の開催地は6箇所減，開催数は4回減である。隣接するナルルデレ区は6千人減少しているが，定期市の開催地数，開催数ともに変化はない。他の9区に関しては人口が増加しており，定期市開催地及び開催数は6区で増加している。人口増加と共に交通インフラの整備も進み，市内の地下鉄及び路面電車，そして郊外の都市と結ぶ İZBAN と呼ばれるライトレールが開通している。路線バスによる交通網は以前から路線数も多く発達しており，新たな公共交通とともに市民の足となっている。公共交通の発達とともに生活圏は拡大しているが，日常の食品等の生活必需品は居住地近くの定期市での購入が根付いているものと推測される。表3のイズミール大都市圏の周辺部に位置する諸都市の場合，表2の中心部に比べると人口規模が同等であっても定期市の数が多い傾向にある。曜日については木曜の開催が割合として高い。表4で中心部と周辺部を比較すると中心部の方が週末に開催される割合が高い。また，水曜の割合が高いのは，同じ開催地で複数回開催される場合，水曜と日曜との組み合わせが多いことも影響している。開催総数は中心部が115件，周辺部が99件と16件の差で中心部の方が多いが，表2，表3で人口を確認すると中心部の人口は周辺部の倍以上あり，人口に対する割合としては低くなる。トルコ最大の都市イスタンブルにおいても，人口増加とともに定期市の開催数は2009年の358件から2018年の393件[8]と増えている。地区ごと，事例ごとの特徴把握は今後の課題である。

4. まとめ

イスタンブル及びイズミール，2つの大都市圏の定期市数の増加や施設化への動きは人口増加とともに発生していることがわかったが，空間的特質と立地及び活用状況については，事例ごとに確認する必要があり，現地の研究者及び行政機関，小売商管理組合の協力も得ながら引き続き調査を行い，実態を把握する。

大都市への人口集中とともに，スーパーマーケット等の常設の商業施設が日常生活を支え，定期市の形態は減少しているものと推測していたが，住民のニーズに応える形で開設されるケースもみられ，値段の安さと慣れ親しんだ形態が作用してか，結果は増加の傾向にあった。ウルラやフォチャで開催されている女性の手作り市，フォチャのイェルユズ・パザルのような特殊な市が増え始めているのは，スローフード，スローライフなどライフスタイルの変化にも対応する世界的な動きであり，社会的動向との関連性も含め，さらに研究課題として取り組む予定である。

今回調査した都市は規模の大小があるものの，いずれも港を有する都市であり，港周辺の水辺空間の活用がみられる。定期市の一時的な活用と日常的な歩行者空間整備との関連に着目し，今後の取り組みも含め，各行政機関の協力を得ながら調査をすすめる。エーゲ海沿岸の他の都市及びイズミール県内の他の都市についても調査対象とし，エーゲ海地域の地域性を見出すことを目標とする。

註

1 トルコ語 çarşı をチャルシュとカタカナ表記する。伝統的な商業空間を意味するが，商業施設のみや街路，街路と施設，複数の街路の複合体といったように空間形態が多様である。商業施設単体から複合的かつ広域に亘る商業エリアを示す。

2 トルコ語 pazar をパザルとカタカナ表記する。

3 イタリアに本拠地を置くスローシティ協会によって認定された都市。協会の公式サイトによると，環境・エネルギー政策や都市生活の質など72項目の指標があ

り，認定後も質を維持しているか定期的に確認がなされている。2018 年 9 月の時点で世界 30 カ国の 252 都市が認定されており，トルコの都市については 15 事例が認定されている。

4 トルコ共和国文化観光省 , 2018 年 9 月報告書，http://yigm.kulturturizm.gov.tr/Eklenti/60727,eylulbulteni-2018xlsxls.xls?0, 2018/11/29

5 トルコ語表記は yeryüzü pazarı。yeryüzü は地球表面の意。

6 トルコ語 semt は地区の意。

7 トルコ語 salı は火曜日の意。サル・パザルで火曜市の意。

8 イスタンブル小売商管理組合に登録されている開催件数。

参考文献

001. 鶴田佳子，トルコ諸都市のセンター領域と市場空間に関する基礎的考察，昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要 2011，844，p.10-24

002. 鶴田佳子，イスタンブル及びバルケシルにおける市場の空間形態について― 2005 年トルコ市場空間調査報告―，昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要 2006，784，p.114-124

003. トルコ共和国文化観光省，http://www.kultur.gov.tr/, 2018/11/15

004. トルコ統計局，http://www.tuik.gov.tr/, 2018/11/15

005. イズミール市役所，https://www.izmir.bel.tr/, 2018/11/15

006. イズミールトラム，http://www.tramizmir.com/, 2018/11/15

007. ウルラ市役所，http://www.urla.bel.tr/, 2018/11/15

008. フォチャ市役所，http://www.foca.bel.tr/, 2018/11/15

009. チェシュメ市役所，http://cesme.bel.tr/, 2018/11/15

010. イスタンブル小売商管理組合，http://www.istanbulpazarcilarodasi.com/, 2018/11/15

011. スローシティ協会，http://www.cittaslow.org/, 2018/11/15

謝辞

本研究の調査を実施するにあたり，トルコ各地において，行政機関及び現地の方々に多大なるご協力を頂きました。ここに記して謝意を表します。

（つるた　よしこ　　現代教養学科）